

教会の死と復活

— 現代へのメッセージを失ったキリスト教 —

泉 田 昭

序

四月十一日に行なわれた統一地方選挙は、革新派の勝利で終わりました。その結果を調べてもっとも印象的であることは、共産党の非常な躍進ぶりです。自民党と社会党が衰退し、公明党と民社党が僅かながら増加し、共産党が大きく伸びたということができるとでしょう。なぜ共産党が、そのような成果を得ることができたのでしょうか。少なくとも二つの理由が考えられるようです。

第一は、都市化しつつ変化する社会構造にふさわしい組織を確立していることです。急激に変化する社会構造の中にあつて、既存の体制や組織に頼っている自民党や社会党が衰退していくのは当然です。それにたいして、共産党や公明党は、脱組織化していく民衆の多くを再組織し、新しいエネルギーとして活用しています。

第二は、日常活動の充実です。日常生活に密着した諸問題を一つ一つ丹念に拾いあげて解決しながら、それらを組織の拡充に結びつけていくというやり方です。新しい市民運動の発展期を迎えようとしている現代においては、このような方法ももっとも効果的であるということができましよう。

社会の構造的変化に即した組織の再編成と日常生活における活動の充実が、今日の社会に生きるあらゆる団体に求められていることです。それは、今日の社会に生きようとしているキリスト教にとつても、きわめて重要な課題です。その課題に真面目に取り組んでいかなければ、日本における教会は永遠に浮かびあがることができないうままに、ついに死滅してしまうことでしょう。その危険なしるしは、すでに多く見ることができているのです。

一 現代における教会の死

『聖書ニュース』の一九七一年三月号において、榊原康夫先生は次のように警告しておられます。

「最新号『キリスト教年鑑』の統計を調べると、教会ゲバや神学校ゲバで話題をなげた大きな教派の教勢の衰えは大したものではありません。ところが、新改訳事業を支え、伝道と祈禱を表看板にする保守的教派の礼拝や祈禱会の激減ぶりは大変なものです。」

統計の見方は、聖書の読み方と同じように微妙であります。一九七一年度の『基督教年鑑』の統計の数字は、一九七〇年春に各教団において集計されたものであつて、その実勢は一九六九年度のものであることを念頭に置いておかなければなりません。ですから、教会が大きな混乱に陥る前の統計であることを忘れてはなりません。

しかし、『聖書読解術』の著者である榊原先生は、日本基督教改革派教会の書記長でもあられ、『統計読解術』のヴェランでもあります。事実、先生は毎年独特の方法で統計表をつくられ、それを見ると日本におけるプロテスタントの諸教派の実勢と消長が一目でわかるようになっていきます。その『日本プロテスタント教派ベスト二〇』によりま

がらではない。何よりもまず、それは、聖霊のことがらである。福音派の聖書観において、これが、ひじょうに重要なポイントのひとつであることには異論なからう。

神の言である聖書は、決して、聖霊と切り離されることがあつてはならない。聖霊は、聖書の神的著者としていしえの人々を動かしたのみならず、いまも、聖書の著者として、現に、臨在される。この聖霊の働きを通してのみ、わたしたちは聖書を理解することができるのである。

(一) 聖霊はわたしたちをして、聖書を神の言であると認めさせる。カルヴァンは、この点を、聖霊の証明の教理の中で力説した。彼の時代のローマ教会は、聖書を神の言として受け容れるためには教会の権威を必要と言っていたが、これに對し、カルヴァンは、この確実性は、聖霊の証明からひき出されると主張し、聖霊ご自身が、ここで神がわたしたちに語っていると確信させるのだと言った。

(二) 聖書を神の言であると認めることが、聖霊のわざであるのみならず、聖書のいふところを理解させるのも、また聖霊のわざである。わたしたちの精神と心とに對して、聖書本文の奥義を開き示すのが、聖霊の照明のわざである。

(三) 聖霊は、わたしたちを服従へと導く。聖書の真理は、単なる知的真理ではなく、信ぜられ、行なわらるべき真理である。Iヨハネ一・六で、わたしたちは、真理を行なうべきことを読む。IIIヨハネ三では、真理に生きるべきことを読む。

みことばとみたまとは、切り離されることができない。みたまなきみことばは**主知主義と正統主義**であり、みことばなきみたまは**主観主義と神秘主義**である。両者が共に進む時にのみ、**真の神認識**がある。

カルヴァンの言葉を引用しよう——「主は、御自身の御言葉と御霊との確かさを、相互の結合によって密着させたもうた。そこで、御言葉への全き恐れ敬いがわれわれのたましいのうちに根をおろすのは、御霊がわれわれに働きか

けて、われわれに神の御顔をまともに見つめさせるときであり、また反対に、われわれがなんら幻覚にまどわされるおそれなしに、御霊を受けいれるのは、御霊をその御姿、すなわち、その御言葉において認識するときである」(キリスト教綱要一・九・三)。

まことに、はじめより終わりまで、これは神のみわざである。神ご自身が、みことばとみたまによってわたしたちをとらえ、そして、このことが起こる時、わたしたちは、神から逃がれることができない。わたしたちの叛逆の心は、それ自身を神に従わしめるのみ。わたしたちのごうまんな精神は、神の真理の軍門にくだるのみ。わたしたちは、もはや、自分の利己的な心をなさんとはあらず、「主よ、あなたは、わたしに、何をなすことをお望みになりますか」と聞くのみである。

そこに奇蹟はおこる。主は、ご自身のみことばを通して、わたしたちに語る。人の手によって書かれた、このみことばにおいて、わたしたちは神の声を聞く。それは、まさに、全き意味で、わたしたちのための、神のみことばである。

(オーストラリア・ゲローグ改革派神学校教授、神学博士)

(日本基督教改革派仙台教会牧師 石丸新 訳)

と、日本基督教団の礼拝出席者は約三パーセント減であるのにたいし、保守的教派で一〇パーセント以上減少している教団が二つあり、祈禱会出席者では二〇パーセント以上減少している教団が四つもあるのです。このことは、日本の保守的キリスト教に対する、きわめて重大な警鐘であると言わなければなりません。

いずれにしても、日本におけるプロテスタントは、一九六九年を境としてはっきりと減少しはじめたことを、粉飾されやすい統計の数字までが示すようになったのです。この厳肅な事実を、われわれはどのように解釈したらよいのでしょうか。

(一) 教会の衰退とその理由

外的な理由としては、一般社会における思想的・構造的変化を考慮することができよう。思想的变化としては、民族主義的傾向と世俗主義の浸透があります。一九六〇年代の後半から、日本における民族主義的・国家主義的傾向はいちじるしく強化され^⑤、それが一般民衆の中にある程度浸透していきました。日本におけるプロテスタントの歴史を調べると、そのような時代になると伝道は困難になり、信徒数は減少していく傾向があることがわかります。それは、日本プロテスタントが依然として植民地的性格から脱却できないままであるためであり、自主独立路線を堅持した共産党の躍進ぶりとはきわめて対照的であります。また、世俗主義が経済の急速な発展にともなって社会の各層に浸透し、精神的・霊的なことがらに対する無関心が一般化したことも大きな原因です。

構造的変化としては、日本全体が急激に都市化することによって、それまでの体制や組織がその機能をはたすことができなくなりつつあることです。したがって、そのような体制や組織に依存している諸団体も、その機能を十分に發揮することができなくなるのは当然なことです。また、伝統的な体制や組織に拘束されることを極度に嫌悪する世代がふえつつあることも確かです。そのような状況の中であって、日本の教会は伝統的なあり方と構造に安住することによって、現代に対するレレヴァンス（関連性）を失ってしまっているのではないのでしょうか。そのゆえに、一般の社会に生きる大部分の人びとは、世俗の日常生活に満足しており、不満をいだいている人びとでも教会には何も期待しておりません。

内的な理由としては、教会の構造とメッセージの二つを考えることができます。しかも、そのあり方とメッセージこそ、われわれが今日真剣に考えなければならない問題であり、その問題のほんとうの解決がないならば教会は滅亡してしまふことでしょう。

(二) 教会の使命と構造

過去十年間、日本伝道における教会の重要性を説き、教会の確立のために微力をつくしてきました。それには、幾つかの理由がありました。神の救いの御計画における教会の意義の重大性。植民地的なあり方を脱皮するためにも日本における教会を確立する必要性。超教派的諸運動がもたらす混乱を避けるためにも教会観を明確にしつつ、教会を確立する必要がありました。

しかし、最近になって、そのような発想法と現実の教会のあり方について、深い反省と疑念をもつようになってきました。それは、そのような発想法自身がいかにも牧師の発想法であって、社会に生きているキリスト者としての考え方ではないのではあるまいか、という反省です。また、そのような考え方では、根本的な解決は生まれてこないのではないか、という反省です。その反省から、教会の使命と構造について、特に三つの点において考えてみたいのです。

第一は、教会の本質の理解です。教会の本質について考えるとき、次の使徒パウロのことばは欠くことのできないものです。

「神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです」(エペソ一・二三、二三)。

「教会はキリストのからだであり」ということばから、われわれはキリストとキリスト者の生命的一体性と共にキリスト者同志の有機的一體性の真理を学ぶことができます。また、「いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところですよ」ということばから、この地上における教会のすぐれた特質があることを知るのです。教会のこのようにすぐれた特質は、きわめて本質的なものであって、教会とキリスト者の現実の欠けによって否定されるようなものではないことをよく知っています。

しかし、われわれキリスト者は、教会のその本質を正しく自覚しながら、生ける復活のキリストによって、現実の教会においてその本質を具現する者でなければなりません。なぜなら、現実における教会の姿は、その本質的なあり方とはあまりにも遠くはなれたものだからです。実際、日本の教会は、教職中心の伝統的なあり方をそのまま踏襲し、主要構成要素である信徒を現実には疎外してしまっています。また、分裂したままの多くの教派が存在し、すべてが中途半端です。われわれは、このような教会の現実を、聖書における教会の本質的なあり方に近づけるために、あらゆる努力をつづけなければなりません。

第二は、教会の使命の理解です。教会の使命とあり方について、C・W・ウィリアムズはこのように語っています。^④

「a 教会はあまりにもしばしば教会自体の生命に関心を持ちすぎたので、その課題がこの世の他の諸制度のパン種になることであることを忘れている。

b パン種になれという召命は、制度の諸様式がその外形を変更する時に変化するものである。」

C・W・ウィリアムズの論点は、きわめてはっきりしています。今日の教会は、みずからのためにだけ存在し、あまりにも過去のあり方に固執している、ということです。教会はパン種として他のために存在し、制度や構造の変化に応じてみずからも変化しつつその機能をはたしていかなければならない、ということです。

これは、ただ一つの教会のあり方について言われているのではなく、今日の教会一般に関して語られていることです。社会から遊離したかたちにおける個人の靈的救済のみを考えて、社会に生きる人間の生活における救いを考えることのできないあり方と体質について警告しているのです。それは、教会を構成しているキリスト者個人のあり方についても言えることで、個人的心情の満足を追求することにあけくれして、社会にたいする責任を忘れる傾向があります。また、教団や教派についても同様であって、それぞれの教団の存在を絶対化し、その存続と発展のためにすべてが考えられる現実があります。それらはすべて、教会の使命に関する正しい理解を欠いている、と言われてもいたしかたがありません。今日、日本における教会は、あらためてその使命を確認し、社会の変化に応じたあり方を確立しつつ、その使命をはたしていかなければなりません。

第三は、教会の構造の理解です。日本の教会の構造は、教派によって少しずつ相違がありますが、基本的には教職中心です。しかし、そのような構造では、都市化し流動化していく今日の日本の社会構造において積極的に宣教を展開することはできません。宗教学者である井門不二夫氏は、次のように指摘しておられます。^⑤

「都市社会を人口流動を中心とする異質的かつ開放的社会と規定すれば、比較の意味において、戦前はまさしく農村優位社会であり、同質的かつ閉鎖的社会であったと言えよう。……しかし、今日では事情が異なる。都会には隣人の顔さえ知らぬ異質的な人々が集まる。住を求めて、職を求めて人々は移動するし、その自由が保証されている。このような移動する人々の大群に、個々の布教師がはいってみたところで、パーソナルな接触は成り立たない。専門教

師が前線に一人で出る伝道時代は過ぎ去り、信徒全員が接触フロントを広げる時代が来たと言つてよい。」つまり、これからの宣教の主体は信徒であり、宣教の領域は日常生活でなければならぬというのです。要は、そのことがどのようなしたら、現実に可能となるか、でしょう。そのことを可能にするためにも、現在の教会の構造的変化は必定です。

まず、信徒の自覚と成長です。隣人との生活を通しての接触を活用しつつ、その人をキリストに導くことができる者にならなければなりません。人びとの日常生活の諸問題の解決のための良い助力者になることです。

次は、そのことができるようになるために、実際のな指導と教育が必要です。牧師は「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるために」(エペソ四・一二)、教育と訓練の働きを真面目に行なわなければなりません。説教だけでは不十分です。

最後は、組織の再編成です。今日の教会の組織は、会堂と牧師を中心としたものであって、かならずしも信徒の日常生活における証しを基本にしたものではありません。しかし、これからは、すべての信徒がそれぞれの生活の領域において証しと成長ができるような組織をつくっていかねばなりません。

二 現代へのメッセージを失ったキリスト教

「伝統的な教理が新たに吟味・検討される時代の中に、われわれはいる。だが、下手をすれば、一方では信仰の確信と教条的自己絶対化が、一方ではいわゆる『総検証』と雪崩のような全面的崩壊が、取り違えられかねない、そのようなきわどい時代である。真実な歩みが新たに始まるかも知れないが、いっさいを失ってしまうかも知れない。そのような、約束と緊張に満ちた時代の中に、われわれはいる」と村上伸氏が述べておられるように、今日のキリスト

教は危機的な状況の中におかれているのです。

日本の教会は、はたして現代への真実のメッセージを持っているのであろうか。すでに失っているのではあるまいか。それは、まことに大きな問題です。そして、私はすでに日本のキリスト教は、現代へのメッセージを失ってしまったと考えざるを得ないのです。

さて、現代へのメッセージを失ったキリスト教を、一応次の二種類に分けて考えることができます。

(一) 現代へのメッセージを失った社会派的キリスト教

第一は、現代へのメッセージを失った社会派的キリスト教です。現代的であることには成功しましたが、メッセージそのものを失ってしまいました。

社会派的キリスト教といっても、その内容はきわめて雑多であります。神学的色彩のものから社会的イデオロギーのものまで、その内容は多彩であり雑多です。ここでは、特にR・ブルトマンによる史的イエス探求の努力を極端に展開することによって、ナザレのイエスはケリユグマのキリストではなく、社会革命者イエスであると主張する者たちを言います。かれらは、そのラディカルな神学とイデオロギーによって、教会内に大きな波紋を投げかけてきました。

しかし、かれらは、真実のメッセージを失っていたのです。使徒パウロは、「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです」(Iコリント一・二二、二三)と宣言し、また「ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです」(一・二四)と力づくよく語っています。つまり、キリスト教における真実のメッセージは、十字架と復活のキリストによる救済であり、したがってキリスト教の本質を歴史的・現象的にだけ説明することは不可能です。

科学的・学問的であることは、欠くことのできないことです。しかし、キリスト教の福音の本質は、その歴史を科学的に扱うことによっては、かならずしも説明しつくせるものではありません。まして、一つのイデオロギーによって解明できるものではありません。

ですから、歴史におけるイエスを語るだけでは、それは真実のキリスト教のメッセージであるということではできません。聖書が示すケリユグマのキリストこそ、われわれに託されたメッセージであるからです。社会派的キリスト教の牧師も、聖日ごとに説教しています。説教しなければならぬのです。当然その説教の内容は、使徒パウロのそれとは本質的に違ったものであり、ある時は社会批判となり、ある時は道徳講話で終わっています。そのような教会においては、信徒も語るべきメッセージをもっていませんから、伝道する必要も感じていません。

そのような教会においては、すべてが相対化され、説教においては神の知恵が、生活においては神の力が失われています。その結果は、教会の中に雪崩現象が起り、はてしない混乱がつづいています。かれらは、人間の知恵によって人間を捕えようとして、かえって人間を失っているのです。現代であろうとして、現代へのメッセージを失ってしまったのです。

(二) 現代へのメッセージを失った教会派的キリスト教

第二は、現代へのメッセージを失った教会派的キリスト教です。かれらは、本質的なものを観念的に捕え、むなしなことばで語るだけで、現代に生きる者たちにはなんの意味ももっていません。

この種の教派に属する牧師の多くの者たちは、神学とか思想ということばをひどく嫌悪して言います。「神学ではありません。福音です。伝道です！」しかし、そのように語る人のメッセージを聞くと、ひどく独善的であったり、主観的な体験話にすぎない場合が少なくありません。このようなメッセージには誇張も大きく、最初は感激して

聞いていた者たちも、やがて適当に割引して聞くようになってしまいました。そして、メッセージそのものに対しても、無意識に不信感を抱くようになるのです。

今日の社会に生きる大多数の人びとは、平凡な生活をすごしている平凡な人間ですが、実はその平凡な生活の中で人間として生きることに深く悩んでいるのです。そのような平凡な人間にとって、あの福音の福音的なメッセージが真実の解決となるところに、われわれの宣教があるのです。

福音をわかりやすく伝えようとして、福音と倫理の不毛な混同をする誤りにも気をつけなければなりません。聖書における倫理的教訓を美しいことばをもって観念的に語る牧師も少なくありません。歴史と現実の状況から切断された倫理的教訓は美しく、聞く者たちに快い感動を与えます。しかし、それはあくまで現実から遊離した観念であって、現実の生の指針とはなりません。もし美しい観念的なことばによって生きようとするならば、かならず現実によってきびしい報復をうけることでしょう。

ある者は、牧師は美しいゲットーの住人であってわれわれとは縁のない話であると考え、安易な二元論に従って生きるようになります。他の者たちは、その観念的な倫理によってみずからを傷つけ、牧師を責めます。そこには現代における状況と人間が見失われており、やはり現代へのメッセージとはなっています。

それは、メッセージが個人の霊的救済に終始しているときも同じで、時代や社会との関連性を失った個人的メッセージは、現実に対してはあまり意味をもっていません。そのようなメッセージは、内在化し情緒的であることによつて、かえってキリスト者の社会的感性和エネルギーを失わしめているのです。

誤解しないでいただきたい。私は、社会的福音を説いているわけではありません。今日の社会の中にあつて、その状況との関連性を失ったメッセージは、もはや現代へのメッセージではなくなっている、と言っているのです。

三 現代に生きる教会

(一) 現代におけるメッセージ

現代におけるメッセージと、現代的なメッセージは、根本的に違うものです。H・テイーリケは、『現代に信仰は可能か』という著書の中で、次のように述べています。^⑥

「このような種類の『現代的神学』はいつでも存在したものであって、今日が初めてというわけではありません。それどころか、すでに二千年前から存在しているものなのであります。私どもは、繰り返し、繰り返し、神の真理の小包を開いてみては、自分に気に入らないものをすべて取り除いてしまっておりました。私どもは、イエスの姿を、まったく恐ろしいやり方できざんでしまつて、イエスが自分自身の、その時その時に現代的であると考えた概念というプロクルステスのベッドに^⑦適合するようにまでしてしまつたのであります。私どもは最初の数世紀においてはギリシヤ的なロゴス概念によって、イエスを切り整えてしまい、哲学的に平板化してしまいました。啓蒙主義の時代にはこれを理性的な存在とし、理想主義においてはこれを理念とし、文化プロテスタント主義においてはそれを一人の徳の教師とし、また、実存哲学者たちにおいては私どもに人間の存在の深みを垣間見せてくれる一人のソクラテスにしてしまいました。イエス・キリストは教会史全体を通じて、常に新しく十字架につけられるという、そのプロセスを苦しみ味わつてこられました。イエス・キリストは鞭打たれ、傷つけられ、そして常に新しく体系と哲学という牢獄の中に閉じ込められておしまいになりました。イエス・キリストは概念の墓の中に埋めこまれ、思想の屍として、石の板で覆われておしまいになり、もはや、身動きすることができず、もはや、私どもを不安に陥れることがないようになせられておしまいになりました。私どもはイエス・キリストをこのような形で、私どもの思想の戦線に組み込ん

でしまうことによつて、無害なものにして来てしまつたのではないでありましょうか。」

鋭いユーモアをもつてH・テイーリケが語っていることは、イエス・キリストご自身が現代への真のメッセージであつて、現代的メッセージではないということだ。そして、イエス・キリストが現代へのメッセージとなるためには、まず自己と現代がキリストにひき寄せられ、キリストによつて変えられなければならないということだ。それは、使徒パウロの姿勢でもあるのです。「なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」(Iコリント一・二五)。「この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によつて自分を変えなさい」(ローマ二・二)。

この世をキリストに連れていくことは、またこの世にキリストを連れてくることでもあるのです。同じH・テイーリケは、次のようにも述べています。^⑧

「もし、私が聖書をヘブル語やギリシヤ語の原典によつて朗読をするならば、それはほとんど誰も理解しないことでありましょう。私はそれを少なくとも、翻訳しなければなりません。しかし、翻訳とはいつたい、何を意味するのでありましょうか。それが意味するところは、明らかに古い使信を今日の言語に形を変えてみせなければならぬということでありまふ。すでに、ルター訳の聖書は、そのかなりの部分にわたつて、今日理解できなくなつてしまつております。しかしながら、翻訳をするということは、それ以上のことを意味しております。翻訳するということは、さらに同時に『近くへ持つてくる』ということをも意味しております。そうすると、聴衆は、これは私に関わりがあるのだ、と気づくようになるのです。」

確かに、イエス・キリストは現代へのメッセージであるが、それが現実におけるメッセージとなるためには、みず

からがキリストによって変えられると同時に、みずからにおいてキリストを翻訳する者でなければならぬのです。それは矛盾ではなく、緊張であります。その緊張関係の中に生きることが信仰であり、また真実に神学することあります。そして、そのような神学こそ、現代への生きたメッセージとなるのです。

神学と伝道を分断してあたかも対立するもののように考える傾向は、思想的にも教會的にも未熟な日本のプロテスタントの悲しい産物の一つであります。むしろ、「伝道なき神学は空虚にして、神学なき伝道は盲目なり」と言うべきです。その両者が、あたかも車の両輪のようになって機能するとき、日本における伝道はめざましく進展し、教會は健全に成長していくからです。

特にきびしい状況のもとにある今日の教會にとって、このことは重要であります。教會をとりまく社会環境もきびしく、教會の中にも多くの混乱があります。そのような状況の中において、聖書にもとづき生けるキリストに結びついた神学的形成の努力を怠るならば、熱心な伝道活動を展開しても教會の成長には見るべきものはないでしょう。また、広い教派的対話による神学的形成を軽視するならば、健全な教會の成長を期待することはできません。そこに、日本福音主義神学会が結成されたことの振理的意義を見、また大きな期待を寄せている理由もあるのです。

(二) 現代にメッセージを伝える人

前に言及しました『日本プロテスタント教派ベスト二〇』という一覧表を注意深く調べていくとき、困難な時代における教會成長のためには、少なくとも次に述べる三要素が必要であることがわかります。事実、それらの諸要素を備えている教団や教會は、一般的な退潮ムードの中にあっても発展しているのです。それら三要素とは、第一は伝道より神学による教會形成に特色があり、第二は現代における教會のあり方に真剣に取組んでいることであり、第三は指導者が四十才代であって若いことであります。

現代は、すべてにおいて変化の激しい時代です。歴史における宗教の役割を学ぶとき、それはあたかも車におけるロー・ギアのような役割をはたしているということができるとでしょう。つまり、スタートのときには発進力を発揮し、スピードが加わるとエンジン・ブレーキの役割をはたすのです。それと同様に、宗教はある時代には変革の起爆力となり、ある時代には変革のブレーキともなります。その相違は、時代の状況にもよりますが、やはり、その指導者によることも少なくありません。今日の日本において、教會は時代おくれの指導者たちのゆえに、その時代の発展のブレーキの役割を演じているだけではなく、時代の変化と社会の発展からも取り残されようとしているのです。そのような現実の中にあって、若き指導者たちを得ている教団・教會が発展しようとしているのは、きわめて当然なことであり、あります。

今日の困難な状況の中にあって、これからの教會の真実な指導者となることのできる人物は、次の諸条件を備えた人でなければなりません。

第一は、聖書信仰に立ちつつ思想的・神学的修練のできている人です。聖書信仰に立つとは、聖書は誤りのない神のことばであると固く信じると共に、聖書によって生きることでもあります。また、真実にキリストを知り、キリストと共に生きることを知っている人のことです。また、祈りの人です。しかし、問題は、これら信仰の基本が明確に確立しているだけではなく、それらにもとづいて神学的・思想的に修練のできている人でなければなりません。激しく変化していく複雑な今日の時代の状況の中にあって、判断を誤ることなくしかも積極的にそのプログラムを展開し、その宣教活動を推進していくためには、神学的・思想的に十分な訓練をうけていなければならぬことは当然です。また、新しい世代の指導者や信徒を養成するためにも、そのことは欠くことはできません。

これからは信徒による宣教の時代ですが、信徒による宣教が現実に行なわれるためには、教育と組織化とプログラ

ム化が必要であります。そのことは、しばしば語られてきましたが、実行されている实例はきわめて少ないのです。これからは、それを現実に行なうことのできる指導者が必要です。

第二は、激動する現代とその現代に生きる人間について、的確な認識能力を備えた人でなければなりません。教会には、本質的な面と歴史的な面があります。つまり、神のイスマエルであり、キリストのからだであるという本質的な面と共に、現実の歴史と民族の中に存在している有機体でもあります。そのゆえに、その時代と民族における諸問題を的確に把握しつつ、宣教のプログラムを実践することのできる者でなければなりません。

また、福音の宣教においても、現代の諸問題の中に生きる人間の的確な理解にもとづいて行なわれなければ、十分な効果を發揮することはできません。

第三は、若い指導力のある人物です。すでに述べたように、困難な時代の中にあっても成長をつづけている団体の指導者たちのほとんどは四十才代です。それは、激変する時代において適切な判断をすることができるだけではなく、それを実現することのできるエネルギーを持っているからです。

しかし、現代は変化の激しい時代です。そのような指導者を得ている団体でも、さらに若くて有能な指導者たちの養成を怠るならば、やがて新しい時代に対する適応性を失い、衰退しはじめることでしょう。また、次の世代を担う学生たちの心をつかえることができないならば、滅亡の道をふたたび歩みはじめることでしょう。

現代に神のメッセージを伝えることのできる人は、現代に生きている神の人です。そのような神の人をつくることこそ、教会が現代に生きることのできる唯一の道であります。

注

- ① 一九七一年度版『基督教年鑑』
- ② 国家主義的傾向は、一九六〇年代後半からしだいに強くなり、一九七〇年代になるときわめてはっきりとしてきた。それについて、日本のキリスト教に対する状況もきびしくなってきた。
- ③ C・W・ウイリアムズ『教会』一七二ページ
- ④ 『現代の教会』二〇一―二〇二ページ
- ⑤ 『福音と世界』一九七一年四月号一二三ページ
- ⑥ H・ティリーケ『現代に信仰は可能か』四一―四二ページ
- ⑦ ギリシヤ神話で、追剣プロクルステスが、通行人を捕えてベッドに寝かせ、ベッドより身長が長ければその分だけ足を切り落とし、短ければベッドの長さまで腿で打ち伸ばした故事による。
- ⑧ H・ティリーケ『前掲書』二二―二三ページ
- ⑨ 渡辺善太氏の「体験なき神学は空虚にして、神学なき体験は盲目なり」をもじったことばである。

(日本バプテスト連合 練馬バプテスト教会牧師・聖契神学校講師)